

民衆の視点から見た戦争—沖繩戦

林 博 史

- I 沖繩戦にいたる過程
- II 沖繩戦の経過
- III 日本軍による沖繩県民に対する残虐行為
- IV チビチリガマとシムクガマ
- V 本土決戦準備と民衆
- VI 沖繩戦から学ぶもの——国家と民衆
- VII おわりにかえて——戦没者と平和について

I 沖繩戦にいたる過程

日本は中国への侵略戦争に続いて、1941年12月8日マレー半島と真珠湾を攻撃して、東南アジア・太平洋地域へのあらたな侵略戦争、アジア太平洋戦争を開始した。日本は1942年前半までに東南アジアの広大な地域を占領したが、連合軍の反攻の前に次々と後退を余儀なくされた。44年7月にはサイパンなどマリアナ諸島を占領され、日本の敗北は決定的となった。さらに44年10月には米軍はフィリピンに上陸した。

フィリピンの戦況が絶望的になった1945年1月大本営は本土決戦の計画を決定した。米軍はまず沖繩か台湾に来ることが予想されていたが、沖繩は「皇土」すなわち「本土」とは見なされず、本土決戦準備のための時間をかせぐ持久戦の場とされた。沖繩に配備された第32軍は初めから玉砕することを定められていたのである。沖繩戦に先立つ2月、元首相であり天皇の重臣であった近衛文麿は、敗戦は必至であるとして「速に戦争終結の方途を講ずべき」であると天皇に直接訴えたが、天皇は米軍を一度叩いてから有利な条件で戦争を終わらせるという考えを示して近衛の上奏を拒否した。有利な条件とは「国体」を護持すること、言い換えれば天皇制を維持するために沖繩あるいは台湾で戦おうというものだった。沖繩戦は、もはや勝利の可能性がなくなった日本が、天皇制を残すために住民の犠牲をかえりみずにおこなった、捨石作戦だった。

軍中央は1945年に入ると本土決戦準備を優先して沖縄への増援を取りやめた。そのため沖縄では「一木一草」にいたるまで戦力化することがはかられ「軍官民共生共死」がうたわれた。つまり軍に全面的に協力し、軍が玉砕するときには県民も一緒に死ぬということだった。沖縄県民は天皇制を守るための犠牲を強要されたのである。

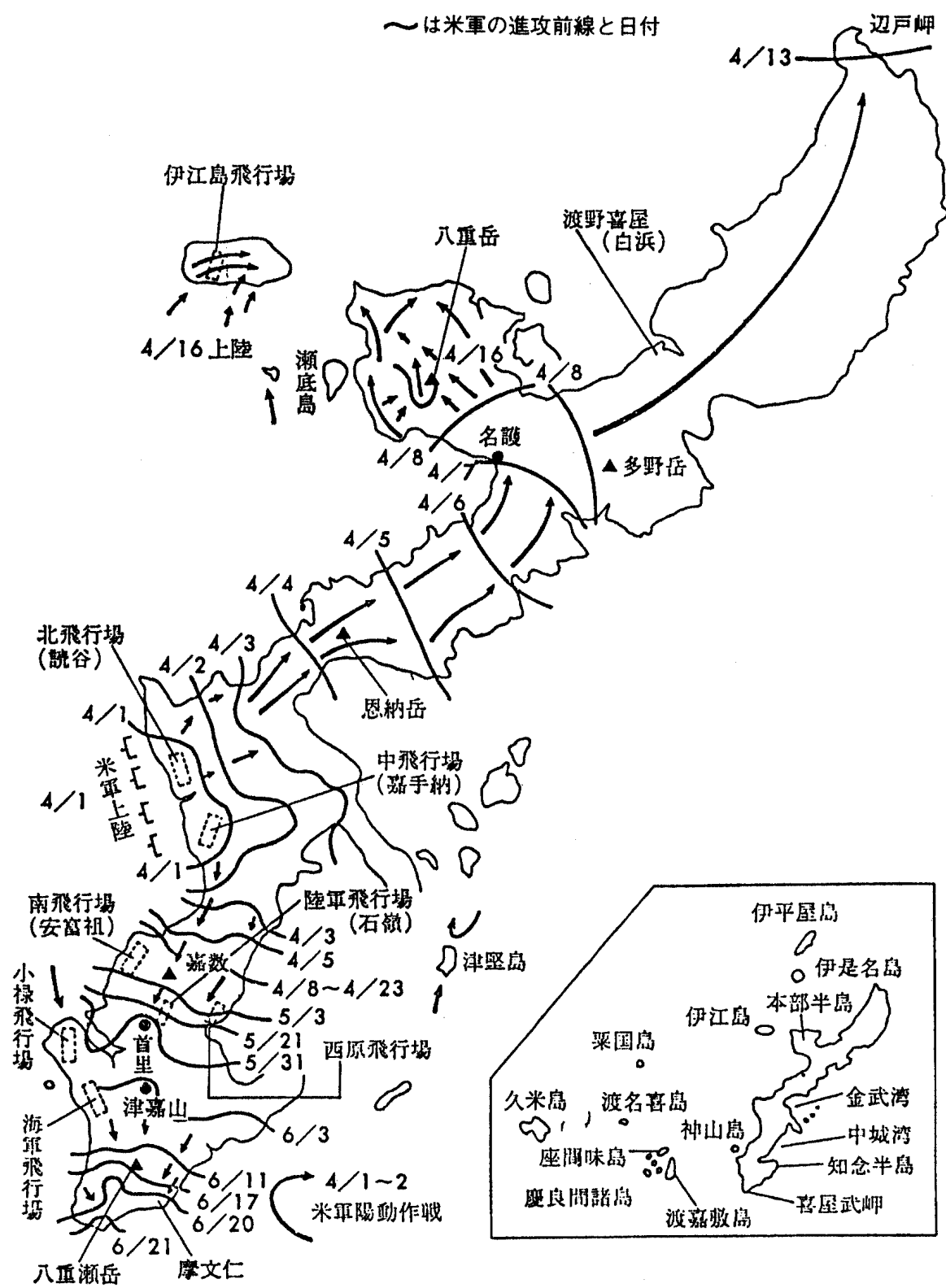
その一方で軍は沖縄県民を不信の目で見ていた。かつては琉球王国であり日本に編入されてから日が浅く愛国心に欠けること、移民が多いので英語を話す者や米本土・ハワイに親類がいる者が多く、スパイになる危険性が高いことなどが理由としてあった。また軍司令部は「沖縄語を以て談話しある者は間諜として処分す」という命令を出していた。本土の者には理解できない沖縄の言葉話すだけでスパイとして処刑するというこの命令に軍の県民への不信感が示されている。

米軍の側から見ると、日本を敗北させるためには日本本土への上陸作戦をする必要があると考えていた。そのための拠点となる強力な基地を確保するために沖縄を占領しようとした。

II 沖縄戦の経過

沖縄戦の経過は次のように区分できる。

- 1 1945年3月23日～3月31日
沖縄本島への砲爆撃の開始と慶良間諸島への上陸占領
- 2 4月1日～4月7日
米軍の本島無血上陸，本島南北分断
- 3-1 4月8日～21日（北部・伊江島）
本部半島など北部，伊江島占領
- 3-2 4月8日～5月末
首里北方の中部戦線（日本軍主力との激戦），日本軍主力の壊滅
- 4 5月末～6月22日
日本軍の南部撤退，米軍の一方的攻勢，日本軍の組織的抵抗終焉
- 5 6月23日～7月2日
米軍による掃討戦，米軍の沖縄作戦終了宣言
- 6 7月3日～9月7日
米軍による占領と敗残兵の掃討，沖縄守備軍の降伏調印式



沖縄戦の経過

出典：大城将保『沖縄戦』高文研，を一部修正
 藤原彰編著『沖縄戦・国土が戦場になったとき』青木書店，73頁より

日本軍は主力部隊を首里の北方から南部に集めて、そこで持久戦をおこなうことにしていた。そのため米軍上陸地点である中部西海岸にはほとんど兵力をおかなかつたために米軍は無血上陸を果たし、一気に本島を横断した。北部の本部半島と伊江島には若干の部隊を配置したが、4月21日までには米軍はほぼ占領した。ただ敗れた日本軍は山中に逃げ込み、そこで住民に対してさまざまな残虐行為を働くことになる。

上陸後、南下してきた米軍は4月8日、日本軍の主力陣地とぶつかり、その後、わずか数キロをめぐって一か月半に渡る激しい攻防戦が繰り広げられることになった。

日本軍の作戦計画には、さきほど述べたように本土決戦準備のための時間稼ぎという目的と、有利に戦争を終わらせるために米軍に打撃を与えるという目的があった。しかしこの二点は矛盾する面を持っていた。持久戦のためには、攻勢には出ず、米軍の攻撃に耐える方がよい。しかしそれでは米軍に打撃を与えることはできない。米軍に打撃を与えるには攻勢に出る必要があるが、攻勢に出ると逆に損害が大きくなり短期間に勝負がついてしまう。第32軍は前者の持久戦の戦法を取ったが、天皇はそうした戦術にいらなかった。彼は先に述べたように米軍に打撃を与えることを重視していたので、何度もそのことを軍に要求し、その結果、天皇の意思には逆らえず、第32軍は二度にわたって攻勢に出て、二度とも大打撃を受けて失敗に終わったのである。5月初めの総攻撃が失敗に終わると、もはや日本軍には攻勢に出る余力はなく、天皇は沖縄への関心を無くしてもっぱら本土決戦準備に関心を集中させていった。しかし沖縄の守備軍には天皇から見捨てられたことなどわからず、ひたすら時間稼ぎの戦いを続けた。

もはや日本軍の主力は壊滅し首里の第32軍司令部の陥落も時間の問題となった5月22日、首里で「玉砕」するかどうか検討した軍司令部は、あくまでも時間稼ぎをする方針を採用し、本島南端にまで撤退し抵抗を続けることを決定した。

5月末、数日にわたって豪雨が続き、米軍の攻撃が緩んだ隙を突いて、日本軍は南部へ撤退していった。動けない一万人以上にも上ると見られる重傷患者は、青酸カリなどによって殺された。日本軍は捕虜になることを恥辱と考え、米軍に保護されることを拒んだからである。この考え方は民間人にも適用され、米軍に保護されようとする住民を背後から射殺したり、保護された住民を拉致してきて処刑するなどの残虐行為を各地でおこなっ

たことはよく知られている。

6月以降の戦いは、米軍による一方的な殺戮戦でしかなかった。日本軍の南部撤退によって、南部に避難していた多くの住民が戦闘に巻き込まれて犠牲になった。住民の犠牲の多数はこの南部撤退後に生じている。もし日本軍が首里にとどまっていたならば住民の多くは助かっていた。

たとえば激戦地であった中部の浦添市（当時は浦添村）では住民の戦死者の54%が南部撤退後に生じている。南部の糸満市では約70%になる。北部では長期化にともなう飢えやマラリヤによる死者が多いので、戦闘が早く終わっていれば死者の多くは出ていなかったはずである。女子生徒たちが動員されたひめゆり学徒隊の死亡者は136人にのぼるが、6月18日（解散命令が出された日）までの死者は計19人（死者全体の14%）にすぎず、117人（86%）は6月19日以降の死者である。もし病院壕に赤十字と白旗を立てていればほとんどの生徒たちは助かったのである。

そのようなことから判断すると、時間稼ぎのための南部撤退がなければ、沖縄県民の死者約15万人のうち約三分の二、10万人以上は助かっていたと考えるよくだろう。

沖縄戦は、天皇制を維持するためにずるずると戦争を引き伸ばした結果、おこなわれた戦闘だった。言うまでもないことであるが、南部撤退が不要だっただけでなく、沖縄戦そのものが意味のないものだった。

Ⅲ 日本軍による沖縄県民に対する残虐行為

沖縄戦の重要な特徴は、多くの沖縄県民が日本軍の手によって虐殺されたことである。その理由の第一はスパイ容疑である。たとえば久米島では米軍に保護された島民、島民に投降を勧告した者、朝鮮人の一家など20名が女性や子どもも含めて虐殺された。本島北部の大宜味村渡野喜屋では米軍に保護され食糧などを支給されていた住民が日本軍からスパイだとして海岸に集められ手榴弾をなげられて20数名が殺された。米軍に保護されたというだけでスパイと見なされて殺される対象になった。

第二に戦闘の邪魔になるという理由である。本島南部では自然の壕に住民が隠れていたがそこに日本軍が入ってきて住民を追い出した。鉄の暴風が荒れ狂う中に放り出されることは死を意味した。また壕に日本軍と住民が同居した場合には、泣く声が敵に聞こえると言って赤ん坊や幼児の首をしめたり、注射で殺していった。また米軍に投降しようとした住民を背後

から狙撃したケースもあった。

「集団自決」と呼ばれている出来事も各地でおこった。これは実質的に日本軍によって住民が死に追いやられたものである。

米軍が最初に上陸した座間味島では171名、渡嘉敷島では329名、慶留間島では53名（いずれも慶良間諸島）が「集団自決」をおこなった。これらの島に共通しているのは、駐屯していた日本軍から捕虜になるのは恥であり、いざという時には死ぬように教えられ手榴弾も配られていたこと、米軍は住民を捕まえると女性は強姦し戦車で轢き殺すなど残忍な殺し方をするとたたき込まれていたこと、である。日本軍がこのように住民を教育した背景には、住民が米軍に投降するとスパイをするという不信感があった。だから「集団自決」に追いやったことと住民虐殺とは表裏の関係にある。本島でも読谷村のチビチリガマや南部の各地で「集団自決」があった。チビチリガマでは、中国などへの従軍経験者が、住民への強姦や残虐行為など日本軍が中国でおこなってきたことを話して聞かせ、「自決」を促した。日本軍がアジアの人々に対しておこなった残虐行為がこうした悲劇を生み出したのである。

こうしたこと以外にも日本兵による住民からの食糧強奪が横行した。沖縄戦が始まる前にも駐屯する日本兵による女性への暴行、民家からの食糧や物資の略奪が頻発していた。あまりの日本兵のひどさに「占領地に非ず無断立入り禁ず」という立札をたてる者まで現れた。

八重山や宮古では大量の日本軍が駐屯したうえ飛行場建設などのために農地を潰され、軍によって酷使されたため食糧難に陥り、飢えとともにマラリヤが猛威をふるった。人口3万1000人の八重山では1万6000人がマラリヤにかかり3600人余りが死亡した。特に波照間島では軍によって強制的に島民全員が西表島のマラリヤ地帯に移住させられ、島民1275人中461人、実に36パーセントがマラリヤの犠牲になった。これも実質的に日本軍によって死に追いやられたと言える。

こうした日本軍による邦人住民虐殺、「集団自決」の強要などは沖縄だけでなく、すでにサイパン、テニアン、フィリピンなどでおこなわれていた。アジアの人々に向けられていた日本軍の刃は日本人にも向けられたのである。

Ⅳ チビチリガマとシムクガマ— ‘非国民’ が人々の生命を救った

中部西海岸沿いの読谷村にある，この二つのガマ（自然にできた鍾乳洞の壕）でおきた出来事は対照的である。

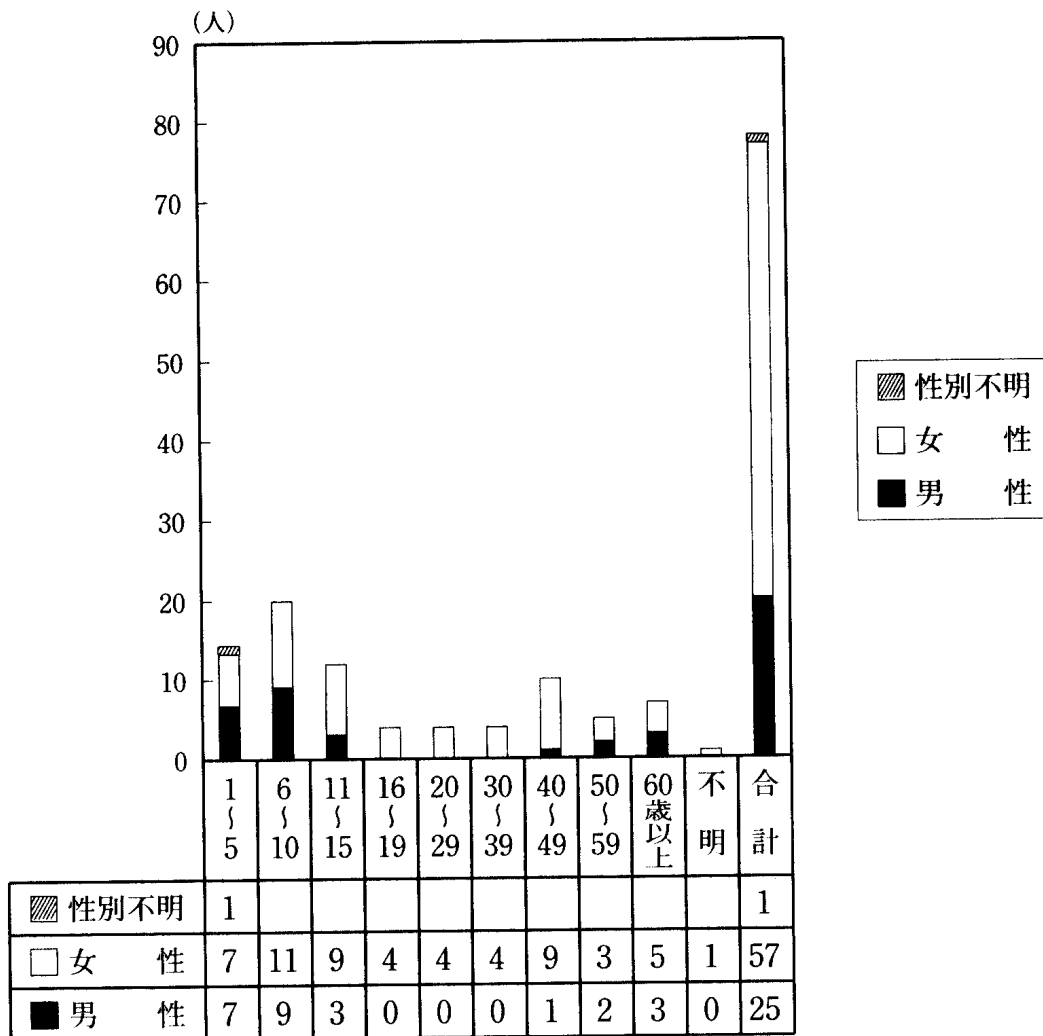
4月1日米軍は読谷海岸に上陸してきた。この直後の4月2日におこったのが読谷村の波平集落の人々が避難していたチビチリガマでの「集団自決」だった。

チビチリガマでは「集団自決」により83人が死亡した。ここでは，中国に兵士として従軍し，日本軍が中国の人々に対しておこなった残虐行為を見聞してきた元兵士と同じく中国に行っていた元従軍看護婦が，「自決」を主導した。米軍につかまることを恐れて，注射で殺したり，ふとんに火をつけて窒息死したりした。チビチリガマでの犠牲者の年齢別の構成（表1参照）は，83人のうち15歳以下が47人，国民学校生以下の12歳以下に限っても41人を占めている。このこどもたちには自分の意思で「自決」を判断することはできないと見なければならない。また大人たちにしてもガマのくびれたところで火をつけられたため逃げようとしても逃げられず煙に巻かれてしまった人たちがかなりいると見られる。

このようにチビチリガマでの事態は，日本軍の意思を代弁した元軍関係者らの独走によって，多くの老人女性こどもがまきこまれて死んでいった事件であり，集団で「自決」したというようなものではなかった。「ウソを教えなければ，ほんとうのことを教えてくれたなら，誰も死なずにすんだのに」という生存者の言葉に，自分たちはだまされていたという痛恨の念がにじんでいる。アジアへの侵略戦争の経験，捕虜になることを許さなかった日本軍の思想が人々を死においやったと言える。

一方，チビチリガマの近くのシムクガマには波平の人々約1000人が避難していた。米兵がやってきて「カマワン，デテキナサイ」と呼びかけた。警防団の少年らが竹槍を持って突撃しようとしたが，ハワイ帰りの比嘉平治さんとそのおじの平三さんの二人が「竹槍を捨てろ」とやめさせ，外に出て米兵と交渉し，住民を殺さないことを確認してから，ガマの人たちに投降するように呼びかけた。こうして約1000人の人たちは投降して助かった。40～50人だけは「自決」すると言って奥に入ったが4日後に投降してきた。シムクガマでは艦砲で犠牲になった4人以外はみんな助かった（このシムクガマは全長2570メートルの大きなガマであり，現在わかっているところでは沖縄本島で玉泉洞について長いガマである）。

表1 読谷チビチリガマの犠牲者（年齢別構成）



出典 下嶋哲郎『生き残る』205-207頁をもとに、さらにチビチリガマの前に建てられている碑を参考にした。

(注) 9歳以下の女の子で年齢不明の1人は6～10歳に含めた。男女の区別は名前でおこなったが判断しにくいケースがあるので一応の目安である。成年男子の最低年齢は47歳であり、16～46歳がない。

この比嘉平治さんはハワイでバスの運転手をしていたので英語がかなりできた。ハワイでかなり儲けて読谷に戻ってきて瓦葺きの家を建てた。当時はほとんどがワラ葺かカヤ葺の家だったので立派な家だった。そのため日本軍は彼の家を接収しようとしたが、平治さんは拒否した。また日本軍将校の横暴をしかりつけるなど日本軍の横暴をはっきりと批判する人だった。そのために日本軍からにらまれ、周りの人々からも‘非国民’扱いされていた。日本軍が村にやってきたとき、日の丸の小旗を振って出迎えた

甥に対して「日本の政治家、軍人は、アメリカの国の力の大きさを分かっているのか」と日本軍を無邪気に歓迎する村民をにがにがしく思っていた。そういう‘非国民’が一千人の命を救ったのだった。

ハワイに移民で行っていた人は、そこで当然アメリカ人というものを知っており、日本軍が宣伝するような残酷な「赤鬼」ではないことを体験で知っていた。だから住民しかいないことを米兵に話せば、命を助けてくれると考えたのだ。当時、多くの沖縄の人々が日本軍の宣伝を信じこんでいたことは証言でも明らかである。米軍に捕らえられたら、女は辱められてから殺されるし、男は戦車で轢き殺される、ということを実に信じていた。さらに住民であっても米軍に捕まることは恥辱であり、いざとなれば死ぬべきだという教育＝皇民化教育が徹底的におこなわれていた。しかし、移民帰りの人の多くは、そうした教育を十分には受けていなかったし、しかも日本軍の宣伝のうそを見抜いていた。もちろん彼らは、日本軍と一緒にいた時には主導権をとることができなかった。なぜなら投降しようと住民に呼びかけることはスパイ行為とされて、日本軍に殺害されてしまうからだ。実際にそうした理由で日本軍に殺されたケースが数多く知られている。だから日本軍がいなくなることが必須条件だった。

他にも多くのガマで集団で米軍に投降し助かった人々がたくさんいるが、そうしたガマは日本軍がいなかったところだった。

V 本土決戦準備と民衆

こうした沖縄戦での経験は沖縄だけに限られたものと考えてよいのだろうか。

沖縄を失った日本は本土に米軍を迎え撃つ、いわゆる本土決戦をおこなおうとした。政府は1945年6月に国民義勇兵役法を公布し15歳から60歳の男子と17歳から40歳の女子を国民義勇戦闘隊に編成し「一億特攻」をかかげて、国家(天皇)のために命を投げ出すことを求めた。その一方、大本営陸軍部が出した『国土決戦教令』では、敵が「住民、婦女、老幼を先頭に立てて前進」してきた場合にも「敵兵撃滅に躊躇」するな、と書いてある。つまり勝利のためには時には同胞の婦女老幼をも容赦なく殺せと言うのだ。

米軍はまず九州に上陸してくると考えられていた。九州の防衛を担当していた第16方面軍は、住民の疎開を検討するが結局疎開計画を放棄した。そのための施設、食糧、輸送などを検討すると疎開は実行不可能なので、

住民は最後まで軍隊とともに戦場にとどまって弾丸が飛んでくれば一時戦場で退避することに決めた。つまり住民は戦場に放置するということである。これは関東地方の防衛にあたっても同じだった。さらに本土決戦にあたって遊撃（ゲリラ）戦をおこなう計画もあり、大本営陸軍部の『国内遊撃戦の参考』では「民心の動向」を偵察し、「変節者」には「断乎たる措置」を取れ、すなわち処刑せよと言っている。

住民を根こそぎ動員しながら、生命や安全の確保は放棄し、裏切る者は容赦なく処刑せよというのが、日本軍の国民に対する姿勢だった。

天皇と政府・軍中枢は長野県松代の地下大本営に立て籠もり、生き残りをはかっていた。本土決戦がもしおこなわれていたならば、沖縄戦と同じ様な状況はるかに大規模におこっていただろう。

こうした日本軍の体質は現在にもつながっている。自衛隊は「専守防衛」の建前から日本が戦場になったことを想定した訓練をおこなっているが、住民の安全確保、避難などの住民保護策は考えられていない。住民を利用することは考えても、住民の生命や安全を守る意思が欠けているという点では日本の軍隊の体質は戦前戦後も変わっていないように見える。

VI 沖縄戦から学ぶもの—国家と民衆

アジア太平洋戦争とは、何よりも石油などの重要な資源を確保するために東南アジアの占領を目指しておこなった戦争であり、東南アジアで日本軍が行ったことこそが、その戦争の性格をはっきりと示している。

沖縄は、沖縄戦によって多大な犠牲を被った地である。沖縄戦はアジア太平洋戦争の最後の大規模な戦闘であり、日本軍が沖縄住民を殺害し、死に追いやったことに特徴のある戦闘だった。沖縄で戦った日本軍は多くが中国戦線を経験した部隊だったことはよく知られている。アジア太平洋戦争の中での最初の代表的な住民虐殺だったシンガポールとマレー半島での肅清＝住民虐殺を行った軍首脳は中国戦線での経験から、占領直後に一気に肅清という荒っぽい手段に出た。

日本の侵略戦争は、朝鮮・中国侵略に始まり、マレー半島への侵略とそこでの住民虐殺をへてアジア全域に拡大し、その行き着いた帰結の一つが沖縄戦であった。沖縄が南方進出の拠点として宣伝されるのも東南アジア侵略の中でだった。侵略に組み込まれたことが、逆に悲劇を生み出すことになった。

さらに沖縄にとってチビチリガマの出来事は、天皇の民＝日本人になろうとして（なることを強いられて）戦争になげこまれていった帰結だった。日本本土から差別されてきた沖縄の人々は天皇のために尽くすことによって‘日本人’になり、差別から逃れようとした。しかし山内徳信前読谷村長が「沖縄の歴史は、かの大交易時代に象徴されるように逞しく栄えた時代があった。ところが、近世、近代の沖縄の歴史は、まさに苦難と抑圧・差別の歴史であった。そのはての姿が悲惨な沖縄戦のいまわしい体験であった」（読谷村『人間性豊かな環境・文化村—読谷村第2次総合計画基本構想』1989年）と述べている通り、近代沖縄の行き着いた先が沖縄戦（チビチリガマの悲劇）であった。沖縄の独自性を抹殺し、ひたすらヤマトとの一体化をめざした結果がそれだった。しかも沖縄は本土防衛・国体（天皇制）護持のための捨て石とされただけでなかった。

戦後の1947年に昭和天皇はアメリカ政府にメッセージを送り、沖縄を米軍が占領しつづけてくれるように申し出ている。軍備を放棄した憲法第9条をこころよく思っていなかった昭和天皇は沖縄を米軍に提供しようとしたのだった。天皇にとって沖縄と沖縄の人々は、自らの地位を守るための捨て駒でしかなかった。沖縄の人々が日本人になろうとしても結局、日本はあくまで沖縄を差別し、最後には切り捨てていったのであった。その後、沖縄の人々は米軍の圧制に対して激しいたたかいをおこない、1972年ようやく日本に復帰したが、日本政府は在日米軍基地の75%を沖縄におしつけたまま今日にいたっている。日本政府と、沖縄の人々の声を黙殺している多くの本土の人々はいまだにそうした沖縄への差別をおこないつづけている。

沖縄戦の教訓として山内前村長は次のようにも述べている。

「それは沖縄戦という悲惨な体験が、戦争というものの実体がいかなるものであるのか、その実相を暴露してみせただけでなく、軍隊というものが人々の安全を守り、平和と自由を保証してくれるどころか、結果的には破滅をもたらす以外の何者でもないことを証明してみせたのです。すなわち、軍隊は国民の生命、財産を守りうるものではなく、実際には個々の国民一人ひとりあらゆる意味での犠牲を強いる強権として存在したということであります。」（読谷村『平和の炎』Vol. 1, 1988年）

沖縄戦は、国家というものが国家を守るためには人々の生命を踏みにじっていくことを示していた。沖縄戦の中で生き延びた人々は、国家のウソを見抜き、‘非国民’となることによって人々を救ったのである。

VII おわりにかえて—戦没者と平和について

戦没者に対して、「みなさんの犠牲の上に今日の日本の平和と繁栄が築かれました」とか「みなさんの死があったから、今日の平和が生まれました」というような言い方がよくされる。それもあまり深く考えることなく、年齢に関係なくごく普通に語られ、あるいはそう思われている。チビチリガマの事実を掘り起こした知花昌一氏は筆者に対して次のように語っている。

「シムクガマと『集団自決』で多くの犠牲を出したチビチリガマとを見ればわかるように、チビチリの犠牲者は死ななくてもよかったんだ。なにも死ぬ必要もなかった。もし彼らが生きていれば、平和を築くために働くことができただろう。生き残った者が必死でがんばったからこそ現在があるんだ。『みなさんの死があったから、今日の平和が生まれました』というのはちがう。彼らが戦争で死なずに生きていれば、もっともっといい社会を作り上げることができたにちがいない。」

チビチリガマに避難していた人々は、事実を教えられていたならば、誰も死なずにすんだはずだった。はっきり言えば、そこで死んだことはなんの意味もないことだった。

ひめゆりの女子生徒たちは、軍とともに南部に撤退し、看護婦としての仕事もないまま壕に隠れ、ついには軍に見捨てられた。病院壕であれば、表に赤十字の旗と白旗をかかげて、投降の呼びかけにしたがって壕を出ていれば、誰も死なずにすんだ。彼女たちの死に一体なんの意味があったのだろうか。みんな生きることができたにもかかわらず、捕虜になることを許さないという日本軍の狂気によって犠牲にされたにすぎない。生きていれば、新しい沖縄の建設に若い彼らはきっと貴重な役割をはたしたはずだ。

ニューギニアのジャングルに日本軍将兵たちは、武器弾薬や食糧の補給もなしに放りだされ、戦況が不利になると軍中央から見捨てられ、米軍に投降することも許されず飢え死にしていた。そこで死んでいった10万の兵士たちの死にどんな意味があるだろうか。すでに日本の敗戦が明白であ

ったにもかかわらず、天皇制を守るために、フィリピンの山中で倒れた50万の兵士や捨て石作戦の犠牲になった20万の沖縄戦の犠牲者にどんな意味があったのだろうか。「死んだ人々のおかげで……」などというのなら、シムクガマのように生き残った人々は役立たずだ、死んだほうが平和のためになったとでも言うのだろうか。

「みなさんの死があったから、今日の平和が生まれました」というのは、生き残った者たちの責任逃れにすぎない。なぜ戦争がおき、そしてそれをくい止められなかったのか。侵略戦争を遂行するような政府をなぜ許し、自分たちもそれに協力していったのか。なぜ侵略戦争に反対するために身体を張ってたたかった人々を見殺しに、しかもその弾圧に手をかすようなことをしたのか。そして戦争が終わって、そうした自分たちのあり方について真剣に反省し総括することなくずるずると過ぎていったのか。「みなさんの死があったから……」という言葉によって、そうしたことを真剣に問い直すことを回避してきたのではないか。さらにはそうした人々を死に追いやった指導者たちを免罪してきたのではないか。死者を美化することによって、戦争の醜い本質を覆いかくし、新たな戦争への道をはき清めてきたのではないか。そして、死を拒否して生き延びた人々の行為を恥ずべきこととして否定しさろうとしてきたのではないか。今日になってもまだ日本（人）が、侵略戦争に反対して体を張って抵抗し、特高警察の拷問によって殺されたり傷つけられた人々の名誉を回復しようとしなないことは、こうした戦争を美化する意識と関わっているだろう。

私たちは、チビチリガマやひめゆりをはじめとする戦争犠牲者の死が、生きることができたのに死を強いられた、無駄死にであったことをしっかりと見つめなければならないのではないか。そして、彼らをそうした死に追い込んだのはなにか、二度とそうしたことをおこさないために私たちは何をしなければならないのか、そのことをはっきりと総括することは私たちの責任であり、その責任を果たしたときに初めて、人々の死がけっして無駄死にではなく、平和の礎になるのではないだろうか。それが死者に対するもっとも丁重な弔いの仕方だろう。「自分たちの歴史を総括できた者が、未来に向ってものが言える」のである（喜納昌吉の言葉、『沖縄タイムス』1992年1月16日）。

【主な参考文献（アイウエオ順）】

- 安里要江・大城将保『沖縄戦—ある母の記録』高文研，1995年
- 池宮城秀意『戦争と沖縄』岩波ジュニア新書，1980年
- 石原昌家『証言 沖縄戦—戦場の光景』青木書店，1984年
- 同 『沖縄の旅・アブチラガマと轟の壕』集英社，2000年
- 大城将保『改訂版 沖縄戦』高文研，1988年
- 大田昌秀『沖縄のこころ—沖縄戦と私』岩波新書，1972年
- 同 『総史 沖縄戦』岩波書店，1982年
- 沖縄タイムス『沖縄戦記—鉄の暴風』沖縄タイムス社，1970年
- 川田文子『戦争と性』明石書店，1996年
- 嶋津与志『沖縄戦を考える』ひるぎ社，1983年
- 下嶋哲朗『生き残る—チビチリガマの戦争』晶文社，1991年
- 同 『沖縄・チビチリガマの‘集団自決’』岩波ブックレット，1992年
- 同 『チビチリガマの集団自決』凱風社，2000年
- 仲宗根政善『ひめゆりの塔をめぐる人々の手記』角川文庫，1982年
- 藤原 彰『沖縄戦・国土が戦場になったとき』青木書店，1987年
- 同 『沖縄戦と天皇制』立風書房，1987年
- 林 博史「沖縄戦記録・研究の現状と課題—“軍隊と民衆”の視点から」
『自然・人間・社会』第8号，1987年4月
- 林 博史「地域から平和を創る—沖縄・読谷村」『自然・人間・社会』第13号，1992年4月